士清と宣長の交流 ―書簡を通して―

江戸中期以降に活躍した伊勢の国学者に津に谷川士清と松坂の本居宣長がある。両人ともその先祖は北畠家に出ている。いずれも若き日に京都に学び帰郷して国学・神道を極める傍ら医者としても活躍した。極めてよく似た境遇の下、学者として大を成し郷土の先覚者として今も仰がれる存在である。

昨年見つかった「たまむしつか」碑
（長年紛失していた）

谷川士清は21歳で上洛して松岡玄達に儒学など基礎的な学を学び、神道を松岡忠良、更にその師玉木葦斎について神道の免許を受けた。宣長も20歳京に遊学し堀景山に学んだ。遊学期間がずれていたので京都での接触はなかったが、宣長が遊学中、士清の大著「日本書紀通証」一巻の付録「倭語通音」を見てその新規な発明に驚嘆し、それから郷土の先輩として強く意識するに至った。更に宣長の継妻が津の乙部の医師草深氏の娘であったために、宣長の津来訪が多く、宣長の士清宅訪問もあったらしい。現在それを証明する有力な資料はないが、士清の三通の書簡、（明和７／11、明和８／２、安永５／７）に宣長来訪を意味する一節があり、内容は把握できないが一つの疑問が解けた思いがする。宣長には少年時よりの日記が伝えられているが、これを裏づける記事はないのが残念だ。従って具体的な交渉は残存する士清14通・宣長８通の書簡に依拠するより外に道はない。改めて書簡の意義の深さを思うこの頃である。宣長の初信は長文の漢文体で、和歌の衰退を歎き、士清の学問に対する厳しい批判、まず儒教色の払拭と陰陽五行説の非を強調している。これに対しての士清の返信がないのが不思議である。一説に原稿のまま宣長のもとに残存し、それを発見した大平の手で清書されたまま本居家に保存されたものと言われている。宣長が賀茂真淵に師事していた頃のものである。二人の文通が頻繁になったのは、真淵が逝去後のことで、それは丁度宣長の古事記、士清の倭訓栞著述進行の過程であることを物語り、書簡の内容は二人の忌憚のない質疑とその応答の交信であって、飽くまでも道のため、学問のために二人の純粋な共働する姿を見る心地がする。また相手の研究を助成するために資料の彼此融通を図り相互扶助に努めている。原稿の相互検討と意見の交換こそ、学問を愛し互いに信を置ける人にして可能なことで、かかる美しい学者の交流が伊勢の国学者の中で見られるとは誇らしいことである。士清が晩年目と手足が不自由になり、『倭訓栞』を簡略の形で出版する意向を宣長に図った時、宣長はあえて『栞』の価値を強調して完遂を進言している。この涙を抑えての諫言、学友としての激励に畢生の大著が成ったかと思うと感慨も一入である。　（顧問・三ツ村健吉）

13年度の調査・研究について

平成13年度は２回講演会を行ない、両方とも三ツ村先生に講演していただきました。１回目は７月７日で演題は「谷川士清をめぐる人々」、２回目は11月17日で演題は「国学者谷川士清と本居宣長―書簡を中心として―」です。「谷川士清をめぐる人々」は昭和50年に谷川士清顕彰保存会が編集したものを、平成13年に会員の森さんが複製を作成されました。谷川士清の家族・先生・門人・学友についてまとめられた本です。このような研究は先人の苦心の末の成果であり、私たちの世代においてもこのような研究を前進させる努力をしていかねば、と思いました。

また、2001年は本居宣長没後200年にあたり、「宣長さん200年」など多くの記念イベントが行なわれた年でした。このようなことから、第２回目の講演会では、士清と宣長の往復書簡を中心にお話をしていただきました。それによると士清と宣長は書簡によって絶えず学問上の意見交換をおこなっており、お互いの実力を認め合っていたということです。

平成15年２月には、今までの調査結果を含めた企画展示を計画しています。　（研究部会・塚澤　洋）